

## 樹洞と虫たち —珍品たちのすみか—

かるべ はるき  
荏部治紀 (学芸員)

「樹洞」と聞くと、どんな生き物が思い浮かぶでしょうか？たとえばフクロウだったり、ムササビだったり、一般には、鳥獣のすみかとしてのイメージが強いのではないかと思います。ここでは、ほとんどの人が知らないであろう、昆虫と樹洞（ウロ）の関係を見ていきます。

昆虫の中でも、ウロと関係が深いものを「ウロ虫」と呼ぶ人がいるのですが、今ではかなり多様な分類群でウロに依存する昆虫が知られています。ざっと例を挙げますと、甲虫の仲間では、数種のカミキリムシ、オオチャイロハナムグリ（図1）などのハナムグリの仲間、ヤンバルテナゴコガネ、マルバネクワガタ類など、ハチの仲間では、ニホンミツバチ、スズメバチ類、各種のアリなどが、ウロをそのすみかとするのが知られています。また、カマドウマや様々な甲虫、ガなどが、昼間の隠れ家としての利用をしますし、変わったところでは、ウロにたまった水溜りでしか発生しないキロハラビロトンボというトンボもいます。このようにウロも、様々な昆虫の住処となっていることがわかるかと思えます。

興味深いこととしては、歴史的にめったにお目にかかれない「珍品」とされ



図1 オオチャイロハナムグリ。ウロのへりに静止して匂いを出し（じゃこう臭がある）、メスを待つ。

ような昆虫に、ウロをすみかとするものが沢山あったことです。たとえば、愛好者の多いカミキリムシの中でも、ヒラヤマコブハナカミキリ（図2）、ベニバハナカミキリ、ヒゲトハナカミキリといった面々は、たまたま飛んでいるのを見ついたり、ライトに飛来したところを採集する以外には、確実に会うことができなくて、名前のとおり日中花に集まること多いこのグループの中では、異色の存在でした。このハナカミキリの仲間も、植物の枯れ木や衰弱木、ものによっては根を食べたりするものまでいるのですが、そういう心当たりの場所を探しても彼らは見つかりません。しかし、食植性のカミキリムシですので、どこかで何かの植物を食べているはずで、長年の疑問は、偶然の記録の積み重ねの末に、彼らがウロ食いの昆虫だったことがわかって、解決しました。今では常識になっているのですが、最初にウロを探した人は本当にすごいと思います。たとえば、ヒラヤマコブハナカミキリは、アカメガシワやカエデなど、ベニバハナカミキリはケヤキなど、ヒゲトハナカミキリはトチやミズナラなど、それぞれ好みは違ったのですが、みなウロ食いという共通点があったわけです。ウロ虫の面々は、生活史の大部分をウロの中で過ごすことが多く、めったに外部に出てきません。こういう人目に触れない習性があるために、みな「珍品」とされてきたわけです。

いったん習性がわかってしまうと、探し方が確立されます。要するに「ウロ」を覗いていけば良い訳です。かつての珍品達も、普通に見られる種が多いことがわかってきました。低地にすむことの多いベニバハナカミキリなどは、国道一号線ぞいや東京大学の構内などでもみつき、一「国ベニバ」「東大ベニバ」などのニックネームまでつけられました。結果的には普通種だったわけですが、この習性がわかるまでは、まさかそんな身近な場所にいるものとは誰も考



図2 ヒラヤマコブハナカミキリ。かつての大珍品もやはりウロ虫だった（高桑正敏撮影）。

えても見なかったわけです。最初にあげた、オオチャイロハナムグリやマルバネクワガタの仲間もそうでしたが、このように近縁な仲間とは一風変わった「ウロ食い」の習性を持つ種は、調査の盲点となってきたといえます。1990年代は、こうした調査が加速した「ウロの時代」でした。その後も、クチキマグソコガネやコブナシコブスジコガネなど、なかなかお目にかかれなかった種のすみかがウロであったことが次々に明らかになってきました。合言葉は、「珍品はウロを探せ！」

もっとも、ウロというのは、どこにでもあるわけではなく、また彼らウロ虫が好みの、湿度が保たれるウロ（入り口が狭く、中が広い）というのは、そうそうあるわけではありません。ウロ虫の多くは、針葉樹の植林が進んでしまえば生きていきませんし、ウロそのものも樹医さんの手で埋められたり、切除される受難の時代があり、その影響は今もまだ続いています。たかがウロ、されどウロ、この夏、一見木の傷にしか見えない樹洞に繰り広げられる様々な秘密の世界を、あなたも一緒にのぞいてみませんか？

自然科学のとびら

第15巻2号（通巻57号）

2009年6月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館  
館長 齋藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 石浜佐栄子

印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2009 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

